

目次

第14回大会報告

研究発表・シンポジウム・関連企画

総会報告（報告事項・審議事項・収支報告・会計監査報告・予算案）

大会を終えて…………… オムリ慶子

大会発表・参加記…………… 中村美和子・越山桜子・杉山実加・浅野錠治

新入会員自己紹介 …………… 若林陽子

寄稿 『幼児教育史研究』第13号における図書紹介『日本の保育の歴史』について

…………… 松本園子

新入会員・会員異動 / 寄贈図書

機関誌編集委員会・事務局からのお知らせ

第14回大会報告

2018年12月8日に関西学院大学（西宮聖和キャンパス）で幼児教育史学会第14回大会が開催され、研究発表・総会・シンポジウムが行われました。大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

司会：早田由美子（千里金蘭大学）

布村 志保（頌栄短期大学）

1. ナチズムとフレーベル

—国家社会主義によるフレーベル解釈—

勝山吉章（福岡大学）

2. 総力戦体制下の『保育』誌に見る母親動員

—母親向け特設ページを手がかりとして—

浅野俊和（中部学院大学）

3. 国民学校放送における幼年向け番組の検討

中村美和子（お茶の水女子大学・院生）

4. 厚生館保育園の歩み —西條億重の挑戦—

宍戸健夫（同朋大学）

5. 貝原益軒の「予めする」教育思想からみる近世日本の教育

越山桜子（ドイツ・バンベルク大学）

6. 陳鶴琴研究の現在—中国幼児教育史におけるプロジェクト法創始者研究のススメ—

—見真理子（国立教育政策研究所）

シンポジウム

テーマ：「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」

企画・司会・指定討論者：

湯川嘉津美（上智大学）

提案者

小林 恵子（国立音楽大学名誉教授）

永井 優美（東京成徳短期大学）

関連企画（大会前日 12月7日 午前）

「関西学院幼稚園見学会」

関連企画（大会翌日 12月9日 午前）

「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながら

フォローする会（愉フォロ会）」

司会：塩崎 美穂（日本福祉大学）

* 「シュタイナー幼稚園創設者グルネリウス

—グルネリウスとシュタイナーの関わりから—

有川優子（関西学院大学 D1）

* 「デンマークの男性保育者の課題と展望」

上田星（関西学院大学 M2）

総 会 報 告

報告事項

1. 第13回大会年度(2017.10.1~2018.9.30)

会務報告 福元理事(学会事務局長)より以下の報告がなされた。

(1)会員数(2018年11月末現在)171名。

(2)第13回大会(2017年12月9日)が東京大学にて開催され、参加者49名、東京大学発達保育実践政策学センターとの公開シンポジウムには約450名の参加があった。

2. 編集委員会報告

湯川理事より『幼児教育史研究』第13号(湯川編集委員長、高田編集副委員長)の刊行について以下の報告がなされた。第13号は、2018年11月10日付で刊行され、投稿論文総数5本のうち、研究論文1本を掲載した。その他、シンポジウム講演者の報告記録3本、書評1本、図書紹介4本を掲載した。また、次号(第14号)より、投稿要領が変更され、チェックリストが採用される。

3. 「世界教育学会(WERA)東京大会」シンポジウム申請について

福元理事(学会事務局長)より、2019年8月に開催される世界教育学会(WERA)東京大会における本学会として申し込むシンポジウムの実施にむけて、理事会で構想を練っていることが報告された。

4. 会報の発行について

一見理事(会報担当)より、第25号を2018年2月20日、第26号を同年6月25日に発行し、それぞれweb公開版を学会HPに掲載したこと、第25号より編集発送方式を改めたため印刷費について予算を超過している旨、報告された。

5. その他 特になし

審議事項

1. 第13回大会年度決算報告(2017.10.1~2018.9.30)

小玉理事より[表1]のとおり決算報告がなされた後、別府監事より監査報告があり、承認された。

2. 第14回大会年度事業計画(2018.10.1~2019.9.30)

福元理事(学会事務局長)より説明がなされた。

(1) 『幼児教育史研究』第14号の編集

編集委員長は浅井理事、編集副委員長は湯川理事が務める。投稿要領を変更し、論文投稿の際のチェックリストを採用、投稿者は学会HPからダウンロードし、確認後、投稿論文とともに提出する。

(2) 会報の発行

従来通り2月頃に第27(第14回大会報告)号を、6月頃第28(第15回大会案内)号を発行する。

(3) 学会15周年事業

これについては、現在理事会で検討を進めている。

(4) 第15回大会の予定

会場は白梅学園大学(東京)、実行委員長は師岡章会員、日程は2019年12月7日(土)を予定している。以上の承認後、師岡会員より挨拶がなされた。

3. 第14回大会年度(2018.10.1~2019.9.30) 予算案

小玉理事より、資料に基づき説明がなされ、承認された(別掲[表2]参照)。

4. その他 特になし

大会を終えて

第14回大会実行委員長

オムリ慶子(関西学院大学)

12月8日(土)、幼児教育史学会第14回大会は関西学院大学・西宮聖和キャンパスで開催され、58名の参加者(一般会員48名・院生会員5名、当日一般参加者3名、当日院生参加者2名)がありました。遠方で交通の便が悪い会場にもかかわらず、多くの方にご参加いただき、本当に感謝申し上げます。準備から当日まで、理事の先生方から様々なアドバイスをいただきながら、何とか無事に大会を終えることができホッとしております。

大会の前日には、ゲーンズ先生が創設された広島女学校保姆師範科附属幼稚園をルーツに持つ関西学院幼稚園の見学会を行いました。8名の参加者があり、見学後 赤木敏之園長による園の歴史と保育内容についての説明と

懇談の機会をゲーンズ・ハウスにて設け、実習生の受け入れや実習内容、保育の流れ、キリスト教保育などについての質問がありました。

大会当日午前の自由研究発表は6件あり、発表内容から、前半を「戦争期における幼児教育」、後半を「幼児教育の思想」に分けました。若い研究者から重鎮の先生方までの幅広い研究発表は、参加者の興味を掻き立ててくれる刺激的な内容ばかりでした。特に宍戸健夫先生のご発表には大会前から期待が集まり、当日はレジュメの増刷が間に合わないほどでした。

お昼休みには、歴史的建造物であるダッドレー・メモリアル・チャペルとゲーンズ・ハウスを開放し、また図書館では、ペスタロッチーの『ゲルトルートはいかにその子を教えるか』初版(1801年)他、1800年代から1900年代初頭のヨーロッパの絵本コレクションを展示しました。特に多くの方が、原著『もじゃもじゃペーター』の

残酷さに驚かれたようでした。

午後3時から開催されたシンポジウム「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」は、本学で大会を開催することが決まったときから、聖和キャンパスらしいものにしたいと願い、湯川嘉津美先生に企画から人選・内容に至るまでのすべてをお願いしました。幼児教育史学会のシンポジウムで、キリスト教主義保育の歴史を取り上げたのは、今回が初めてだったようです。小林恵子先生のご報告は、高森ふじ先生との幼い頃の思い出から、聖和女子学院での学び、そして大学教員として辿ってこられた人生そのものが、幼児教育の生きた歴史であり、永井優美先生は、頌栄のハウ先生と広島女学校のクック先生に焦点を当てて、キリスト教保姆養成校の目指す保姆像について論じてくださいました。最後に小林先生の発案で、広島女学校保姆師範科から、聖和と関西学院大学の合併に至るまでのスライド映像を映し出し、湯川先生が大きな歴史的流れの中にお二人の発表内容を位置付けてくださり、多くの参加者の方々から、大変素晴らしく、心に残るシンポジウムだったとの感想をいただきました。

大会後の関西学院会館での懇親会には、当日参加の方を含め20名が参加され、勝山吉章先生の司会のもとで、ゆったりとした素晴らしい会となりました。

大会翌日の「愉フォロ会(通称)」には11名の参加者がありました。大学院生たちが発表した内容に、さまざまな角度から質問やアドバイスがあり、彼らにとっては今までにない充実した時間となったようでした。

来年度の大会は、師岡章先生を大会運営委員長として白梅学園大学で開催されます。会員の皆様の一層のご参加とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

大会発表・参加記

「熱」ある学会での初発表を終えて

中村美和子(お茶の水女子大学大学院・院生)

このたびは入会をお認めくださり、とてもうれしく心より御礼申し上げます。過去に第10回大会(お茶の水女子大)、第13回大会(東大)を見学しましたが、関西学院大学における第14回大会では研究発表の機会をいただけました。私は、幼児教育史学会の研究大会の良さを、次のように受け止めております。

(1) 会員が一堂に会し、研究発表とシンポジウムの内容を共有すること、(2) 研究発表の全体討論に時間をかけようとするため、新しい気づきをもたらされること、(3) シンポジウムのテーマが魅力的で、登壇者のお話が有機的に結びつき、テーマに関する見取り図を提供してくれること。

ここには専門家がつどい、議論が交わされることで研究が深化していく、学術コミュニティとしての存在意義

が強く感じられます。会員お一人ひとりが学会を尊重され、研究に真摯に取り組む姿勢が「熱」として伝わってくる場だと思えます。それは機関誌も同様で、丁寧に再現されたシンポジウムが特集に生まれ、書評・図書紹介で学術成果への評価が十全との印象を抱いています。

さて、自分の研究のことです。50代になってからの取り組みですが、子どものことについては児童書出版社で紙芝居や絵本を編集したり、医療センターや乳児院、保育園、学校などでおはなし会をして読書支援にたずさわったりという縁があり、それもあって20世紀前半の日本で盛んだった口演童話の発達と変容をたどりはじめました。国家主義の発展とともにあったとされる口演童話は、童話家と呼ばれる専門的職能者の一群を輩出し、彼らのなかに幼稚園を開いた人が多いという点、口演童話家たちが、戦前の国民生活に不可欠だったラジオの子ども番組の制作を支えた点が注目されるところです。このような文化に関する研究は、制度、施設、思想、カリキュラム、実践などを主流とする幼児教育史研究の流れから、やや外れたところに位置づけられるかと思いますが、宮澤康人先生が提唱された「教育文化」という枠組みで考えたとき、文化の伝達で社会の構成員を育む営みの具体例としての口演童話は、考究するに値する対象だと思っています。そしてまた別項に分けられがちな「教育」と「文化」のかかわりが子どもの育ちにどう立ち現れるかの考察にも誘われます。

一堂に会すひとつのコミュニティであっても、対象として扱う幼児教育は国や民族、時代、教育機関、地域、家庭などくくりが実に多様だと、今回の大会でも感じ入りました。いろいろな視角からご助言いただくことを今後の糧に研究に、いっそう励んでいきたいと存じます。

ドイツから大会に参加して

越山 桜子(ドイツ・バンベルク大学)

12月の第一か第二週末に日本で行われる学会に参加するのは、例年ドイツの大学で教鞭をとっていると難しい。ところが2018年は3月末に第一子を出産し、子育てに追われている身であった。せめて博士論文の研究はなんとか続けたい、学会での発表もしたいと思ってはいたものの机に向かって研究に勤しむことはできていなかった。そんな葛藤に悩んでいるときに太田素子先生から暖かい励ましの言葉と発表のお誘いを受け、研究の再出発のきっかけにしようと博士論文のためにドイツ語に翻訳し始めている貝原益軒の『和俗童子訓』についてまとめてみることにした。

私はドイツに約15年住んでいる。ヴェルツブルク大学でマギスターを取得し、博士課程はバンベルク大学で始めた。この数年は教育思想だけではなくヴェルツブルク大学、フランクフルト大学の東アジア研究者にも示唆と刺激を受けながら、江戸時代の教育思想と教育史を研究の中心にしている。

今回の発表は、私がこれまでドイツ語で書いたり論議したりしてきたものを初めて日本語で行ったことになる。何を日本人研究者の前でどのように話すべきなのか悩んだ。そもそも、どれくらいの日本の幼児教育研究者に『和俗童子訓』が読まれているのかわからなかった。発表の初めに会場にいた方々にその旨を尋ねてみると、『和俗童子訓』を読んだことのある人は参加者の1割くらいだった。発表内容では、私自身がオリジナル文献を熟読したことのある W.フンボルトの理論を紹介することで、私の『和俗童子訓』の理解を説明することにした。私は西洋啓蒙思想の教育理論の理解がなければ『和俗童子訓』に魅力を感じ、それを理解できなかつたと思うからである。その工夫が功を奏したのか、発表後、数人の参加者からご意見や励ましを頂き、大変嬉しかった。

勝山先生の発表後のみならず、全体の質疑応答でもドイツのこと、フレーベルにかかわることが、ある一定の共通理解のもと活発に議論されていて、さすが日本の幼児教育の学会だと思った。ドイツでも数人のフレーベル研究者でないとできない議論だったように思う。私のバンベルク大学の指導教授 (Prof. Dr. Grell) が日本の幼児教育研究の歴史に興味を持つ理由を体験できたのかもしれない、このことはバンベルクに戻って報告しようと思う。

今回の帰国は、8か月になる息子を連れていたので、研究発表とシンポのみの参加となった。懇親会をはじめほかのプログラムに参加できなかったのは大変残念である。私が参加している間、生まれて初めて父母と長時間離れた息子は、西宮聖和キャンパスの子育て支援室「さぼさぼ」で私の両親と楽しく快適に過ごすことができた。「さぼさぼ」の利用、授乳室の用意など、オムリ先生をはじめ実行委員各位のサポートに心から感謝している。

初めての大会参加

杉山 実加 (名古屋女子大学短期大学部)

第14回大会が初めての大会参加となりました。保育士養成校を卒業し、現在教員として後進の指導にあたりておりますが、私自身は作文教育史を中心にこれまで研究を行ってきました。こうした研究も生かしながら、幼児教育史研究に取り組んでいきたいと思っております。今回の大会では、研究発表・シンポジウムを通して多様な研究の在り方と、それらの結びつきが研究を豊かにしていくことの大切さを学ばせていただきました。

午前中の研究発表では、日本だけでなく海外についても発表があり、研究対象・手法の多様さを感じました。日本の研究では、いずれも綿密な史料の読み込みに基づく分析がなされており、改めて史料収集の重要性を痛感いたしました。海外の研究では、もちろん他国の幼児教育がどのように展開されていたかという点は関心が向くところですが、今回はそれ以上に、そうした海外の幼児教育を当時の日本人がどのように解釈し、日本の幼児教育に反映させたのかという点、その反対に、日本の幼児教

育を諸外国でどのように翻訳・解釈するかという点で、海外の研究と日本の研究が結び付いていく様子を窺うことができたという印象が強くあります。

午後のシンポジウム「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」では、キリスト教主義保育というテーマで3人の先生方が異なる切り口でご発表くださいました。私にとっては、キリスト教主義保育というテーマそのものが新しい学びでもありましたし、視点の多様さを学ぶ機会ともなりました。小林恵子先生のご発表はご発言にあった通り、「文書ではわからない体験されたからこそ」明らかにできる内容であったと思います。そして、永井優美先生が宣教師たちの保姆像や保姆養成の内容について、湯川嘉津美先生がその位置づけを制度や外部からの視点を以て発表されました。キリスト教主義保育を“内と外”の両方の視点から分析することで、幼児教育史におけるキリスト教主義保育の位置づけがより明確になるとともに、今後の保育者養成を考える上でも重要な視点が示されていると感じました。

偶然の参加から得たものは

浅井 錠志 (日本大正村学芸員 (非))

(名古屋柳城短期大学図書館 歴史資料室 (非))

この度の大会に参加したのはまったく偶然に近いきっかけからだった。まず、学会名の「幼児教育史」が目にとまり、HP ではシンポジウムのテーマ「日本におけるキリスト教主義保育の成立と展開」に興味を持った。長年の課題と門外漢が携わる資料整理に参考にできるかなと思い、気楽に参加した。しかし、会場内で大会プログラムと発表資料を読み、私の課題解決への期待はやや外れたと思ったが、「戦時下」が取り上げられていることに強い関心が沸きすべてお聴きしてしまった。しかも、「お聴きする」にとどまらず、発表趣旨から外れていたかもしれぬ質問をするほど引き込まれてしまったのは、「戦時」に直接視点をあてたテーマ、そうでなくても「戦時」を意識しなくてはならないテーマが並んでいた新鮮さであり、それぞれの研究に頭が下がる思いを深くしたためである。ナチスの戦争責任を問うたドイツとは違い、振り返りの乏しい日本では、常に戦時下への道のりを検証していなくてははいけないと思っているが、「戦争はいけない」の声をあげつつ備えを充実している今日、戦時下の研究を身近に見ることは無きに等しかった。

私は、岐阜県にある公益財団の「日本大正村」で収蔵品の展示・企画をしている。ここには、大正13年に昭和天皇のご成婚を祝し、宮内省が東京府下の漁村の託児所に下賜したピアノが収蔵されている。この収集の経緯は別として、宮内省が記念に下賜するには、組織的に託児していた対象は複数あったと考えられるが、幼稚園の歴史の記述は見られても、託児所・保育所についての歴史的記述はほとんど見られないことが疑問だった。このため、大正時代の幼児を対象とした制度に関心を持って

いる。私はまた、名古屋にあるカナダ人女性宣教師が開いた120年の歴史を持つ保育者養成短大の歴史資料室で資料整理をしている。この2つの所属から、保育所、幼稚園さらに、そこに従事する専門職の養成についての制度、歴史などの知識の必要性を感じていたのである。

その意味で、午後のシンポジウムは大変参考になった。短大の資料整理に携わり最初に驚いたのが、今回のテーマそのもの、女性宣教師が保姆養成所と幼稚園を開き、養成所の卒業生は全国に及んでいった史実だった。しかし、キリスト教各会派がどんな働きをしていたかは理解していなかった。今回のシンポジウムを聞き、ミッションがもたらした広げた幼児の育みに関心が深くなった。

このように今回はのぞき見の参加だったが、多くのことを学ぶことができ、知人に携帯で鉄道や駅の名前を聞きながら、見晴らしの素晴らしい丘の上の風格ある会場にたどり着いた意義は十分にあったと思う。

新入会員自己紹介

新人として、ご挨拶まで

若林 陽子（東京大学・院生）

はじめまして、私は東京大学大学院教育学研究科の修士課程に所属しております若林陽子と申します。第13回大会で発表させて頂くために2017年秋に入会しましたが、ご挨拶がすっかり遅れてしまいました。

第13回大会では、「1960年代の保育における物語絵本の意義づけ—文芸研と東京保問研文学部会の主張に

着目して—」と題して、物語絵本を使った保育実践にどのような積極的な意味づけがなされてきたかということについて発表しましたが、こんな「ひよっこ」にも質疑の時間や懇親会でいろいろな先生方がコメントをくださり、研究の動向や問題意識についてフランクに意見交換ができる場のありがたみを感じました。

私の研究テーマは、大変ざっくり申し上げると「戦後を中心とする絵本の歴史」になります。ただし、いわゆる絵本史が出版社や作家・画家に焦点を当てた議論に落ち着きがちであるのに対して、現在の私の関心は、保育者や母親など絵本の使い手の活動や、絵本を学術的に、もしくは他の背景から論じる人々の活動に注目した「絵本の歴史」を描いてみたいという点にあります。

第13回大会では保育という領域に着目しましたが、この投稿原稿を書いている2018年8月現在は、絵本を扱った学術研究や議論の系譜を整理する一助となるような修士論文準備に取り組んでおります（本稿が公開される頃には論文を終えていることを切に願っています…）。

先達の保育の歴史研究者が昔も今も示し続けている、計り知れない知的的好奇心と綿密な史料調査の成果は多くの示唆を与えてくれます。研究の世界に足を踏み入れて間もない私にとって、知らなければいけないことが膨大であるのは明白です。また、多少なりとも研究を通じて書き手となることがある私は、それらを生み出す苦労と社会的意義の両方を自らの肌で感じてもあります。知見を摂取し再構成し発信するために、謙虚であることを忘れないでいたいと思っています。（2018年夏、受理）

寄稿

『幼児教育史研究』第13号における図書紹介『日本の保育の歴史』について

松本 園子（白梅学園大学）

本学会紀要『幼児教育史研究』13号（2018）の「図書紹介」欄で、汐見稔幸・松本園子・高田文子・矢治夕起・森川敬子共著『日本の保育の歴史』（萌文書林、2017）を取り上げていただいた。お忙しい中ご執筆下さった浅野俊和会員に感謝申し上げます。この際、読後の感想とともに、共著者の一人として指摘された諸点にお答えしたく、本会報に寄稿させていただくこととした。

まず、前半が図書紹介（p.57-58）であるが、本書の「序に変えて」と「おわりに」から多くの文言を引用し、非常に丁寧に紹介してくださっている。一方、なぜか本文については全く言及がなくそれが残念である。

次に、後半の書評的な部分について。第一に、「第1章と第2章以降のつながりをめぐる問題」として、1章の「子ども観」において、「第2章から第7章までの歴史的叙述（通史）を『根底』で支える“保育・幼児教育思想”へ踏み込んでいるのであろうか」（p.59左）と批判されて

いる。

このご指摘には同意する。「子ども観」は保育の歴史として欠かせないものと考えるが、第1章担当者の多忙その他の理由で、第2章以下の保育の歴史と結びつける検討が十分になされず、残念ながら所期の目的を達成することができなかったと私も感じている。ただ、私は1章の内容自体は重要と考えており、浅野会員がどこをどのように批判しているのかとらえたく、該当部分（p.58右～p.59）をくり返し読んでみた。しかし第1章のリード文からの引用のみで本文への言及がなく、批判点を具体的に知ることができなかった。

第二に「時期区分に関わっての問題」として、ひとつは第5章「15年戦争と保育」をとりあげ、第5章リード文で15年戦争の前半と後半に区切っているが、「その区切り目が同章の各節へと効果的に生かされてはおらず」（p.59右）後半に重点がおかれていることを問題として

いる。第5章については、以前（2018年1月）宍戸健夫先生からのお手紙で、前半と後半に分けた方が良かったのでは、という趣旨のご意見をいただいた。浅野会員のご指摘と重なる部分もあるので、以下に宍戸先生への私の返信を掲載する。

5章「15年戦争と保育」は、保育の歴史のなかで、従来このようなくくり方はなく、昭和戦前期と戦中期として扱われてきました。本書では、15年戦争の前半の時期の保育全般のことはリード文で「15年戦争の前半、すなわち日中戦争開始以前は、大部分の人々は不況下でも平時の生活を送り、戦争を意識することはなかった。幼稚園も保育所的保育施設も順調に増加し、日々の保育がすすめられていた」（p.191）と書いたのみで、それ以上にはふれていません。1節でいきなり15年戦争後半の状況にはいってしまいます。いささか歪（いびつ）な構成であると先生のご指摘で改めて感じました。（中略）もし、本書の増補改訂版をだす機会に恵まれれば、5章については現在の3節から4節の構成に変え、「1節」で15年戦争前半期の、侵略と戦争の響きが聞こえつつ、一方で新教育の保育が花開いたという全般的状況について描くことが出来ればと思います。

図書紹介では、時期区分の問題のいまひとつとして、第6章と第7章の扱いを批判しておられる（p.60左）。実はここは、何度読み返しても浅野会員が何を主張されているのかははっきりとは理解できなかったのですが、私の理解の範囲で感想を述べたい。

まず「節での線引きが一応あるとはいえ、第6章「戦後保育制度の確立と展開」という形で、40年余りに及ぶ“昭和戦後期”を一括りとした時期区分も評価が問われる点である」といわれる。では、浅野会員ご自身はどのような時期区分を提案されるのであろうか。

第6章は1～3節で戦後復興期、高度経済成長期、安定成長期という三つの小区分を明示したつもりであるがこれでは「一応」の線引きに過ぎないということか。

先の引用部分に続けて「その終期が1990（平成2）年頃と非常に微妙な時期であり、『元号を基本として時期区

分がなされ』てきた従来の著作への批判と矛盾しかねない問題を孕んでいる（奇しくも、第7章も“平成史”となってしまった）」という。

1990年ごろで時期区分するかどうかは色々な見解があろう。私どもは経済・社会的背景と保育の関係を検討し、このころを転換期ととらえたが、保育の歴史としてより適切な区分はあるかもしれない。しかし、1990年がたまたま1989年1月の昭和天皇の死去と平成への改元に近い時期だからとて、元号による時期区分を採用しないこととどう矛盾するのだろうか？浅野会員が元号による時期区分の方が良いと考えておられるのなら、そのことを明確に主張されたほうが有意義な議論が可能と思う。

第三の問題は「歴史叙述の一貫性をめぐる問題」（p.60左）だということ。本書作成の過程で著者間の調整の努力はしたものの、不十分で問題だらけであることは承知している。そこで、浅野会員の批判点を知りたく、ここも何度も読み返したが叙述の一貫性という点で何を問題にされているのかははっきりしない。それとは別に、この部分の後半で本書が保育内容への踏み込みがなく、制度・政策史に偏していると批判されている。しかし、保育通史に保育内容史を位置づける仕事は、簡単ではなく、我々の力量では無理であった。この分野に蓄積のある研究者にぜひ取り組んでほしいところである。

最後に本書について補足説明をさせていただきたい。本書は、幅広い読者が保育の歴史の全体像をつかめるような本をつくろうととりくんだ。その点で、我々の思いを理解し、400頁近い硬い本を2,600円という価格で出版してくれた萌文書林の英断に感謝している。

しかし、これ以上ページを増やせないとの出版社の意向であきらめたものがある。まず、年表を重視し作成に力をいれたが文字の小さい使いづらいものとなってしまった。また、必須の索引を断念したことも残念である。

なお、地方保育史研究の広がり願って作成した道府県別の「明治大正保育所的保育施設設置状況」は、図書に収録できず、萌文書林のホームページに掲載されている（「日本の保育の歴史/萌文書林」でファイルをダウンロードできる <http://houbun.com/appendix/255>）。

新入会員・会員異動（2018.6～2019.1） 省略

寄贈図書（2018.6～2019.1）

- ・村知稔三・佐藤哲也・鈴木明日見・伊藤敬佑, 2018, 『子ども観のグローバル・ヒストリー』原書房
- ・田中友佳子, 2018, 『植民地朝鮮の児童保護史: 植民地政策の展開と子育ての変容』勁草書房
- ・師岡章, 2018, 『若手保育者の育成法: 組織の活性化は若手の成長がカギ!』フレーベル館
- ・近藤幹生, 2018, 『保育の自由』岩波書店
- ・比較家族史学会監修, 小山静子・小玉亮子編集, 2019, 『家族研究の最前線 3: 子どもと教育: 近代家族というアリーナ』日本経済評論社

機関誌編集委員会からのお知らせ

『幼児教育史研究』第14号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2019年5月1日から5月31日までに事務局にお送りください(郵便は当日消印有効、宅配便などは必着)。詳細については学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、第14回大会年度(2018年10月1日～2019年9月30日)とそれ以前の年度の会費が未納の方に、お送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(振り込み用紙が入っていない会員は完納状態にあります。)なお、本状と行き違いでご納入いただいております場合には、何卒ご容赦ください。

年会費: 一般会員 7,000 円、特例会員(学生・退職者等)4,000 円

送金先: 口座番号 00190-9-73668、加入者名 幼児教育史学会

2) 「会報」への原稿募集

会報を通じた情報提供と交流をはかっています。会員からの研究情報、自己紹介、また、幼児教育史研究への提言、関連エッセイなどを事務局までぜひお寄せください。年2回の会報発行時までに届いた分を調整の上、随時掲載いたします。次回会報は2019年6月頃を予定しています。

3) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は、メールにて事務局までお知らせください。

幼児教育史学会会報 第27号 2019年2月20日

発行者 幼児教育史学会

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学総合教育学系 福元真由美研究室気付

幼児教育史学会事務局

E-mail: admin@youjikyokushi.org

郵便振替 00190-9-73668

編集 一見真理子 印刷 木元省美堂